概要

1．背景・目的

本市では、令和 4 年度厚生労働省モデル事業採択を契機に、医療・介護・福祉・地域の多様な関係者と連携して社会的処方の取組を推進してきた。3 年間の取組を踏まえ、更なる発展に向けて、健康影響予測評価（Health Impact Assessment: HIA）の枠組みを用いた評価を実施した。評価の目的は、⑴本取組が健康や健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health: SDH）に与える影響を検討し、改善の方向性を明確化すること、⑵評価過程を通じて関係者間の共通認識を形成し、より一層の連携強化を図ることである。

2．評価対象

評価対象は、「養父市社会的処方推進事業」（以下、「本市の社会的処方の取組」）全体である。

3．評価方法

医療・介護・福祉・教育・子育て分野の関係者 29 名が参画し、全 3 回のワークショップを中心に、ワークショップでの議論、インタビュー、支援記録、統計データを用いて、取組の影響と改善案を検討した。

4．評価項目

本評価では、影響の検討に加えて、⑴対象となり得る集団の特徴⑵課題・強化すべき機能⑶ロジックモデルの 4 点を検討した。影響の検討においては、個人・家族・地域コミュニティ・システムの 4 領域にわたる 20 項目を重点的な評価項目として選定した。

5．結果の統合と解釈の方法

実施主体の会議及び第3回ワークショップで実施し、複数の収集データを踏まえた議論を通じて結果を取りまとめた。影響の検討では、「方向性（良い・悪い）」「大きさ（大・中・小）」と「根拠の確からしさ（確か・やや確か・不明）」の3観点を設定し、根拠として第2回ワークショップの個人の質問票の回答結果、グループワークの検討結果、事例の分析結果（件数・内容）を用いて影響を整理した。

6．主要な結果の概要

⑴ 対象となり得る集団の特徴と市内規模について

対象となり得る集団の特徴として、「独居高齢者」「過度な飲酒」「家族ケア負担」「経済的困窮」「ひきこもり」の 5 類型に整理した。過去 3 年間に医療機関から社会的処方推進課に紹介された 29 件の事例では、60 代以上が約 86%、男性が約 66%、独居世帯が約 66%を占め、他者との交流・つながりの不足、経済的困難・低所得、不健康な飲酒、服薬管理不良、人間関係や、家族介護等における課題が見られた。ワークショップのグループワークでも、高齢、男性、独居、アルコール、引きこもり、経済的困窮、近所トラブル、介護者といった特徴が挙がった。また、既存の統計データを整理した結果、対象となり得る集団の市内規模は数百～数千人に相当することを確認した。

⑵ 健康や SDH への影響について

20項目の影響を検討した結果、19 項目は良い影響、1 項目（支援者の業務負担感）は悪い影響として懸念されると整理した。 ワークショップでは、質問票への回答とグループワークにより参加者の認識を把握し、19 項目で良い影響と期待される一方、支援者の業務負担感について悪影響が懸念されるという評価になった。支援者の業務負担感の原因には、情報整理・共有に伴う負担、時間的負担、幅広い専門知識に伴う負担、心理的負担、ケースマネジメントに伴う負担が挙がった。インタビュー及び支援記録から収集した 52 件の事例分析では、個人の変化として、他者とのつながり増加、不安感の軽減、就労機会の

獲得、飲酒量の減少、服薬管理改善、生きがいの獲得、スキル習得、自己管理能力の向上が確認できた。加えて、家族の安心感・心の余裕の獲得、地域住民の支え合い意識の向上、地域活動の担い手の増加、居場所の充実、頻回受診の減少、適切な制度・サービスへの新規接続、多職種・多機関での迅速な情報共有や役割分担の実現などの変化も確認できた。一方で、事例の蓄積が十分でない項目もあり、20項目中８項目の根拠の確からしさを「不明」とした。今後も、継続的なデータの蓄積が必要である。

⑶ 今後の改善の方向性

本市の社会的処方の取組は、個人の健康やウェルビーングの向上を中心に、家族、地域コミュニティ、システム面への良い影響が期待できることを確認した。一方、支援者の負担感増加は、取組推進に伴う主要なリスクとして位置づけた。ワークショップでは、取組の課題や強化すべき機能と、それに対する改善案及び支援者の負担感軽減のための提案を検討した。その中でも特に重点的に取り組むべき方向性を以下の通り整理した。

① 地域住民（コミュニティコネクター）からの連絡・紹介ツール整備

民生委員・児童委員、見守りネットワーク事業所、市民団体等と連携し、地域の「気づき・見守り」から支援につなぐ入口を強化する。属性を問わず困り事を把握した際に活用できる連絡・紹介シート（地域版つながり処方箋）を整備し、早期に専門機関・部署へ接続する仕組みを構築する。

② 包括的な支援体制と多職種連携の強化

リンクワーカ―研修を継続し、分野横断の「顔の見える関係性」と多職種連携をさらに強化する。今後は、分野横断的な好事例共有を充実させ、社会的処方の3原則（本人中心性・エンパワーメント・共創）に基づく伴走支援の学びを深める。加えて、有志による定期的な情報交換の場（支援者プラットフォーム）の立ち上げを検討する。

③ 分野横断的な支援記録共有システムの導入

高齢・障がい・子ども・生活困窮など分野をまたぐ複合課題に対応するため、庁内で分散している支援記録を統合・共通化し、タイムリーな情報共有と状況把握を可能にする。併せて、重層的支援関係部局による継続的な検討の場を設け、運用設計と定着を進める。

④ デジタルによる非対面相談（入口）の活用・普及

ヘルスケアチェックシステム（ポジティヴヘルスクモの巣チャート、いきいき生活度チェック）を活用し、非対面での相談・気づきから支援につながる経路を拡充する。マイナンバーカード連携等により、本人の希望を起点に支援者が状況確認・アウトリーチできる仕組みを普及させ、従来把握しにくかった層へのアプローチと自発的な気づきから支援につながる経路を広げ、早期介入につなぐ。

⑤ 「つながるDAYYABU」掲載情報の裾野拡大による質・量の充実

住民の多様な趣味・嗜好に応じた地域コミュニティへのマッチングを促進するため、地域活動・集いの場情報に加えて、身近なスポットや日常利用できる場・店舗等も掲載し、情報の質と量を高める。また情報収集・更新方法を含む運営体制を検討し、継続的に情報を充実させる。

⑥ コミュニティナースの役割・位置づけの明確化と人材確保・育成

社会的処方におけるコミュニティナースの役割と位置づけを整理し、市内でコミュニティナース的な動きを担う人材の確保・育成を進める。具体的には、将来の配置規模、雇用形態、必要な資格・スキル、期待する役割を明確化し、関心層とのマッチングを促す。

評価結果(2)

20項目中12項目が「良い影響」かつ「確か～やや確か」

項目	レベル	影響領域	影響項目	1. 影響の方向性	2. 影響の大きさ	3. 確からしさ
1	個人	身体	本人の身体活動	P	◎	やや確か
2		心理	本人の孤独感	P	◎	不明
3			本人の不安感	P	○	やや確か
4			本人の自己効力感	P	◎	不明
5		精神・エンパワーメント	本人の楽しさ・充実感	P	◎	やや確か
6			本人の生きがい	P	◎	やや確か
7		生活習慣・行動	本人の自己管理能力	P	○	確か
8		社会とのつながり	本人の他者とのつながり・交流	P	◎	確か
9			本人の地域活動への参加	P	○	不明
10		経済	本人の仕事・就労機会	P	○	やや確か
11	家族	心理	家族の安心感・心の余裕	P	○	やや確か
12	コミュニティ	住民同士のつながり	地域住民の支え合いの意識	P	○	やや確か
13			地域住民のつながり・交流	P	○	不明
14		住民主体の活動	地域活動や居場所の充実	P	○	不明
15			地域活動の担い手の数	P	○	やや確か
16		労働環境	地域の雇用・仕事の担い手の数	P	△	不明
17	システム	サービスの利便性	サービスの適正利用	P	△	確か
18		協働体制	多職種・多機関連携	P	◎	確か
19		支援者の負担	支援者(専門職)の業務負担感	N	○	不明
20		既存制度との関係	既存制度・サービスとの関係性	P	◎	不明

①影響の方向性(良い影響(P)、悪い影響(N)　※根拠:　ワークショップの回答結果の正負
②影響の程度(小さい(△):無視できる程度、中程度(○):平均的な程度、大きい(◎):重要で対応を要する　※根拠:ワークショップの回答結果の平均値の大きさ
③確からしさ(分からない(不明):裏付けが不十分、やや確か(やや確か):一部データがある、確か(確か):複数データが照合する　※:根拠:　事例の件数)

評価結果(2)

20項目中12項目が「良い影響」かつ「確か～やや確か」

	確か（事例が10件以上）	やや確か（事例が2件以上）
大きい （◎） （平均値≧1）	・「本人の他者とのつながり・交流」 ・「多職種・多機関連携」	・「本人の身体活動」 ・「本人の楽しさ・充実感」 ・「本人の生きがい」
中程度 （○）	・「本人の自己管理能力」	・「本人の不安感」 ・「本人の仕事・就労機会」 ・「家族の安心感・心の余裕」 ・「地域住民の支え合いの意識」 ・「地域活動の担い手の数」
小さい （△） （平均値＜0.5）	・「サービスの適正利用」	

ー本市の社会的処方の取組に関するロジックモデルー

〈既存の相談支援・参加支援・地域づくりに関する事業〉

子ども	障がい	生活困窮	高齢
子ども・子育て支援事業（子育てサポートセンター利用者支援）	機関相談支援センター（直営）	生活困窮自立支援事業（生活支援相談窓口・直営）	総合相談支援事業（高齢者等総合相談センター業務）
要保護児童対策事業	障害者相談支援事業	福祉無料職紹介所アグウェルやぶ（直営）	権利擁護事業（高齢・困窮・障がい）
家庭児童相談員活動事業		生活困窮者包括相談支援業務	包括的支援・継続的ケアマネジメント支援事業
		ひきこもり相談支援センター事業	
ほっとステーション運営事業・直営	地域活動支援センター	共助の基盤づくり事業	生活支援体制整備事業（生活支援コーディネーター業務）
こども食堂運営助成事業		住民支援事業	地域介護予防活動支援事業
		民生委員・児童委員活動事業	給食サービス事業
			認知症カフェ支援事業

【用語の意味】
- ・アウトプット：活動目標・実績
- ・アウトカム：取組を実施することで期待される変化
- ・KPI：目標達成の度合いを測定するための数値目標

【線の太さ・細さの違い】
- ・太い線：直接的な影響
- ・細い線：間接的な影響

活動内容とアウトプット

相談支援

① **医療機関と連携した相談支援**
・事業の趣旨説明と協力依頼を行い、相談依頼シートを設置している医療機関数

② **リンクワーカー（ヘルスコネクター）研修の開催**
・研修の開催数及び参加を依頼した事業所数

③ **「ポジティヴヘルス」の普及啓発**
・ポジティヴヘルスに関する普及研修会の開催数

参加支援

④ **本人の特性やニーズに応じた参加支援事業**
・参加支援を中心に据えて活動する支援事業者数

地域づくり

⑤ **コミュニティコーピングの開催（市民向けリンクワーカー研修）**
・認定ファシリテーターによる開催数

⑥ **コミュニティナースによるゆるやかなつながりの活動**
・地域における活動日数
・関わった住民数
・地域づくりの支援に関わった案件数

⑦ **無理しない地域づくりの学校「KANAUカレッジ」の実施**
・実施回数
・応募者獲得のための個別アプローチをした回数

⑧ **自治協議会等へのコミュニティ支援**
・関わった団体数、活動実施日数

⑨ **社会的処方ポータルサイト「つながるDAYYABU」の運営と充実**
・登録団体への確認と新規獲得のための活動の実施回数
・レポート掲載数

⑩**社会的処方の考えの普及・啓発（一般市民向け）**
・広報（ホームページ）掲載数

短期アウトカム

課題を抱える人を早期発見し相談ルートが支援者間で明確化される
KPI：・医療機関やそれ以外からの紹介件数
・早期発見に資する起点となる機能の数

孤立や複合的な課題を抱える人を継続的・重層的につながることができる
KPI：
・相談支援を利用した人のうち、多機関で重層的に継続的に支援する体制によりフォローアップした人数

社会的処方やポジティヴヘルスの考えに共感する専門職が増える
KPI：
・リンクワーカー研修及びポジティヴヘルスの普及研修会の参加者数

本人の特性やニーズに応じた多様な社会資源や地域コミュニティとのマッチングができる
KPI：
・個別支援計画の件数
・インフォーマル資源へのつなぎ件数

市民リンクワーカーが増える
KPI：・コミュニティコーピング参加者数

地域に多様な活動や居場所が増える
KPI:
・連続講座を通して「小さなやってみた、やってみる」を報告した受講者数
・つながるDAYYABUの掲載数
・個人や自治協が実施する新たな活動の件数（市が関与・把握したもの）

社会的処方・地域コミュニティに関する情報が市民に広く届く
KPI:
・つながるDAYYABUの登録団体数
・つながるDAYYABUのアクセス数

中間・長期アウトカム

多職種・多機関の好連携が進む
KPI：
・課題・好事例を共有する場（会議体）の数
・関係機関の連携が上手くいっている及び好連携が進んでいると実感している支援者の割合

孤立・孤独感が軽減される
KPI:
・孤独を感じることがある人の割合
・上記のうち支えてくれる人がいない人の割合

市民が主体的に選択・行動できる
KPI：
・自分らしい暮らしができている人の割合

地域の中で人・モノ・情報が循環する
KPI:
・複数の活動に参加している人の割合
・人とつながり、気軽に話ができる場所や機会が複数ある人の割合

最終的に目指す姿

【関連主要施策】
- ・安心できる地域医療の確保
- ・健康・体力づくりの推進
- ・地域福祉の充実
- ・介護予防の充実

健康で自立して生活する市民が増える
KPI:
・新規介護認定者（要介護1以上）の平均年齢

つながりで誰もが健康になるまちの実現

主観的幸福感が高まる
KPI:
・幸せと感じる市民の割合

【関連主要施策】
- ・つながりが支える子育て環境
- ・市民文化の創造の促進
- ・公民館活動の充実
- ・安全・安心な暮らしを守る対策

社会的処方の考え（本人中心性・エンパワーメント・共創）とポジティヴヘルスの考えが広まる
KPI:・支援者および住民への普及イベント参加者数・社会的処方やポジティヴヘルスの考えの認知度

20260204

養父市の社会的処方の取組の課題・強化すべき機能について
【第1回目ワークショップ】まとめ

①入口について

■ 課題

・医療・健診へのアクセス障壁
　病気がありそうだが通院していない
　健診場所が遠い
・情報共有と連携の難しさ
　社会的処方推進課へつなぐ
　イメージ不足
・発見の遅れ
　問題が重度化してから発覚

■ 強化すべき機能

・医療・健診の場
　健診自体をコミュニティの場
　通院困難サポート
　主治医から社会的処方推進課へ
　つなぐ視点
　医療職（Dr, NS, PT）が気軽に
　相談できる雰囲気
・情報共有のツール
　つながり処方箋
・地域の人材や組織
　民生委員・区長・近所の方
・暮らしに身近な場
　イベント、図書館、井戸端会議、
　カフェなど

②支援や関わりのきっかけについて

■ 課題

・同意取得の壁
・受け入れ拒否や無関心
・個人情報の壁
・おせっかいに対する壁

■ 強化すべき機能

・生活背景の情報収集・理解
・見守り
・信頼関係の構築
・段階的支援
・タイミングを待つ

③継続的なつながりについて

■ 課題

・継続的に関わることが
　難しい

■ 強化すべき機能

・本人の主体性を引き出す
　こと

④参加支援について

■ 課題

・移動手段どうする
・つなぎ先の情報どこ？

■ 強化すべき機能

・つなぎ先の選択肢を増やす
　居場所、文化芸術作品、
　自分にできることを見つける
・本人主体
　その人が本当にどういう
　ことがしたいのか

⑤地域づくりについて

■ 課題

・行ってみたい場の不足
・価値観や規範の共有の弱まり

■ 強化すべき機能

・学校教育や文化
　子供の学びが大切
・価値観や規範
　上手な規制が大事

⑥多機関協働ついて

■ 課題

・組織や分野の縦割り

■ 強化すべき機能

・多様な主体との共創
　組織以外でできること
・対話と情報共有の場
　集まって話し合わないといけない

養父市の社会的処方の取組をより良くするための提案

【第3回ワークショップ】まとめ

①入口について

■デジタルを活用した非対面相談

・デジタル
・顔を合わせずチャット・メール・アバター
・アナログ

■見守りや気づきを増やす

・「やってあげる」や「おせっかい」ではなく気を配る等
・入口強化ではなく見守り・気づきを増やしましょう
・緊急時以外は見守る
・基本的は見守るスタンス
・近所の人＝民生委員・区長・おしゃべりおばさんが見守る

■地域の人材や組織の活用

・民生委員・区長・地域の人
・民生委員・区長・地域の人が訪問する理由をつくる
（チラシをポスティングする等）
・近所の人は聞きづらい
・近所の人も
・井戸端会議重要（だけど近所の人は聞きづらい）
・おせっかいしづらい
・各地区のおしゃべりキーマンを知っておく
・駐在所は知っている？
・緊急時は適切につなげる

■情報共有

・情報共有を行う
・普段から近所の人は良く見えているので情報を持っている

②支援や関わりのきっかけについて

■アウトリーチ

・待っててはダメ、アクションをかける
・足を運ぶたびたび※1回であきらめるのダメ
・地域の集いの場に出向く
・個人情報の難しさを超える

■あいさつ・声かけ

・回覧板などを顔を見てあいさつする
・書置きや留守番メッセージを残す
・チャット・オンライン・SNSの活用
・おすそわけ
・あいさつ・声かけ

■顔なじみの関係から段階的に関わる

・顔なじみになることで声をかけやすくなる
・少しずつ深い関わりを深める（無理強いはしない）
・最初は拒否があっても「関わってもらえてうれしかった」

■協力者との連携

・自分がいけなくても協力者をつくる
・つながっている人や話せる人を知る

③継続的なつながりについて

■主体性の尊重

・当事者の主体性
・当事者

■つなぎ先をたくさん持っておく

・つなぎ先としての社会資源をつくっていく
・つなぎ先をたくさん持っておく
・つなげる業務を丁寧・スムーズに

■複数人で関わる

・特定の方に依存しない
・複数人で関わる

養父市の社会的処方の取組をより良くするための提案

【第3回ワークショップ】まとめ

④参加支援について

■つなぎ先の創出

・作品や趣味の教室のs根性にPTがなる
　＝役割ができる
・診療所で作品展示会
・しゃべりの場・コーヒー→診療所で
・作品の展示会
・（居場所の活用や移動手段の課題対応のために）
　つなぎ先がやってくる（移動式コーヒー販売、ヨガ、本、
　コインランドリー）
・発表の場を多様につくる
・ポジティヴヘルスの活用によってやってみたいことや
　得意なことを見つける

■移動支援・移動手段

・（移動手段の課題に対して）利用料金だけでなく
　何の目的で移動支援を使うのかが大事
　（例：楽しみなこと）
・移動支援のプロモーション（例：おためし利用
　できるなど、2000pt活用）

■つなぎ先情報の普及・啓発

・つなぎ先の普及・啓発や自分でも知っておくことが大事
・つながるDAYYABUの活用

■デジタルの活用

・アナログ志向の方も同じ情報量が見られるように工夫
・デジタル活用や高齢者さんのスマホ教室等

■本人と一緒に参加

・新しい場所にひとりで参加する
ハードルが高い
・雰囲気が分かるものや一緒に
行ってくれる人がいれば
・役割が持てることをサポートする
人がいることが大切

⑤地域づくりについて

■マッチング

・募集の場・アプリ・マッチング
・趣味活動・アプリ・マッチング

■住民主体の活動の多様化

・麻雀、映画、おいしいものを作って食べる、
　こどもの体験、キャンプ、
　ラフティング、オンライン●●（禁煙・
　筋トレ・飲み会というオンライン上の
　つながり）
・ちょっとした役割・仕事をつくる
　（しめ縄・子ども食堂手伝い）

■つなぎ先情報の普及・啓発

・ゆるい啓発（社会的処方の）
・インフルエンサー

⑥多機関協働に関すること

■部門間の壁を超える拠点や人材育成

・（集まって話し合わないといけないことについては）
　専門職が集まる部署や拠点をつくる
・コールセンターの設置を行う（包括ORサブ
　センター、コミナス）
・各専門のOB
・自由に動ける狭間担当
・組織の理解
・（境界線をなくすには）基本を常に傾聴して
　受け止め
・勉強会＝学びの繰り返し＝スペシャリストに
　なりすぎて他分野のことを知る機会をつくる
・（多様な主体との共創に対しては）どこが何をして
　いるかを知る機会をつくる
・（対話と情報共有の場については）タイムリーに
　共有や話し合いができる仕組みをつくる

養父市の社会的処方の取組をより良くするための提案

【第3回ワークショップ】まとめ

ー何が負担感になるのかー

■情報整理・共有に関する負担

・地域のことを知らないと繋げられない
・つなぎ先（特に地域）見つかっても誰がキーパーソンで誰に伝えたらいいか分からない
・つなぎ先情報（人や場所）を収集しなければならない
・連絡先がバラバラが多い
・情報がブツブツに切れている
・分野ごとに切れる
・情報のまとめや把握・取りまとめ
・情報共有

■時間に関する負担

・事務負担（重層予算配分の難しさ）
・時間がかかる⇔他業務やケースとの兼ね合い
・時間が足りない
・時間配分
・しっかり話を聞かなければならない（時間が必要）
・伴走するための時間・回数が増える

■幅広い専門知識に関する負担

・ジェネラリストがいない
・幅広い専門知識
・分野外のことを相談されたら
・連携しないと解決できない

■支援者の心理面に関する負担

・支援者が孤立しがち
・どこまでも答え（結果）は出ない
・心理的負担
・なかなか心を開いてもらえない
・支援の終わりがない

■ケースマネジメントに関する負担

・個々の様々なニーズへの対応
・優先順位・緊急度
・アセスメント・振り分け

ー対応策ー

■専門職・非専門職間の関係性構築

・民生委員・区長
・経験積んだ人、ネットワークもあり
・組織内のバックアップ・理解の体制づくりが必要
・医療面だけで解決しない時つなげやすい。その後の支援がしやすくなる。

■情報収集・整理・共有の効率化

・AI活用・支援者のAI活用支援
・支援記録の共有システム（必要な記録内容の整理）
・支援の「記録」をうまくまとめられるもの
・つながり処方箋の記入

■マンパワー確保

・リンクワーカーを増やす
・新分野の人を増やす
・支援者がコールセンターで週３回のシフト制で定年
退職した集団
・コーディネート業務を担う人（役割）
・支えられていた人が支える側に移っていく